
ダメージ

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメージ

【Nコード】

N4859B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

教師との心中に失敗した姉。その弟が愛と死を完結させるための重い一撃を放つ時、世界は何を見るか。

空間は羊水によって支配されている。混沌とは違う、何か別のもの。安定はしていない。むしろ秩序を壊そうと躍動する胎児の一撃のようだ。しかし、それが秩序を破る事は恐らく無い、だから不安な気持ちにすらならない。それはただの重い一撃。

幅の狭い小道を抜けて、夕立の雨の中をビニル傘が進む。道幅はどんどん狭くなり、夕立はどんどん激しくなる。

「君は見たかい？」

返事はない。彼は望んではない。彼女は寡黙であり、その事が何度も彼を救ってきた。

「これは略奪ではない、奪還だ」と独白する。

初めて見た夢は、早熟な四歳の弟が、姉貴の人形と駆け落ちする場面から始まる。

沿線の行き着く先は決まっっていて、もちろんバスは乗客を吐き出す一方だった。ガードレールの曲線の連なる上り坂を越えて、高級住宅地の明りを通り過ぎていく。行き先の案内表示が、終着の『岬』に変わる。

乗客は、病院前から乗った黒髪の男紳士と、坂の下でバスに乗った二十代後半の女性と彼を残していた。バスはぐんぐんと登った。近くに店や民家が全くなかったので、バス自体の光が浮かび上がるように登っていく。

沈黙がやがて、一つの音楽のように熱を持って統一される。正確には、無音ではない、エンジンの負荷、乗客の呼吸、衣服の擦れ合う、ささやかなざわめき。それは、彼にとっては心地良く、振動に身を任せ、この真夜中の小コンサートがいつまでも続けばいいのと本気で思った。

けれども静寂は破られる、まるで永遠に続くものは無いというように、扉が開閉する。

「お客さん、終点です」

黒髪の紳士は、そつと立ち上がり無言で硬貨を落す。彼も握り締めた硬貨を専用の箱に入れる。出口のステップを踏みながら、バスの中を覗いた。女はいつまでも、立ち上がるうとはしない。

「お客さん、終点ですよ」

女は俯き加減で目を伏せていて、彼には女が降りてこない事が分かった。

「このまま営業所まで行きますか？営業所は坂を降りてすぐの市役所前にあるんですが」

女がコクリと頷いた、かどつかは判らないがドアが音を立てて閉まった。背中でバスが走り去るのを聞いた。さて、と彼は思った。安全のためか、崖への道はフェンスによって守られている。紳士はそのフェンスを登って向こう側に降りた。そのフェンスには張り紙がしてある。

『あなたの家族の事を考えなさい』

「家族の事だつて？」

紳士は、フェンスの向こう側から、彼に言った。酷くマヌケだなと思った。

「君は、私がどんな人間だと思うかね？」

そつゆう問い掛けに対する答えを、彼は持ち合わせてはいない。

「私の娘は五歳だった。妻が残して行った一人娘だ」

そこで充分な間を空ける。紳士の意図としての間。

「あまりにも、眠っている顔はアイツにそっくりだった。もちろん私の特徴も受け継いでいたが……。私は夢の中で、眠っている彼女の小さな体の中に入っていった、彼女を乱暴に壊した」

潮風が流れてくる。海が近いのだ。

「毎晩毎晩、その内それは妻になったり娘になったり、あるいは私が寝たどの女でもない顔だったりした」

紳士が泣いているのかどうか、暗闇の中では判らない。

「そして、それは現実になった。最悪の形で夢は実行された。私は

娘を納屋に連れ出して、寒い藁の上に寝かせた。そして壊した」

紳士は彼を見ていた訳ではなかった、彼も紳士を見ていなかった。紳士はフェンスに持たれかかって笑っていた。

「私は死ぬべきか？」

黄昏が鈍い光を放ち、波の音が響き渡った。数秒の長い沈黙。

「ええ、貴方は死ぬべきです」

彼は言った。静かに、ゆっくりと。岬の墓標は長く遠く、闇に降る雨のように冷たい。ビニル傘の尖った鉄の部分が紳士の左胸を貫いて、男はフェンスに繋がれた。鮮血は黒く地面を濡らし、彼の手も濡らした。

「君は私と同じ瞳をしている気がする」

紳士はそう言っ事切れた。あるいはそれは、幻聴だったかもしれない。

彼の姉は早熟だった。やけに大人びた顔と、長い手足。ワイン色の唇。彼女は、英語の教師と恋に落ちた。同じ年齢の女の子が、経験する恋愛ごっことは違う、本当の恋愛だ。

彼はその頃、四歳で、彼がクローゼットにしまい込んだ、姉貴の古い人形を盗み出した時には、彼女は既に教師と交わっていた。

しかし彼女にはライバルも多かった。秘密は露見する。彼女には世間体など関係なかった。ただ深く英語の教師を愛していれさえすれば、些細な弊害だった。

岬には、屋根のある休憩所がある。昼間も観光客など殆ど来ないようなこの場所にすら、椅子と机と自動販売機がある。彼は湿ったタバコに火を点けた。

英語の教師は、彼女が妊娠しているという妄想に執り付かれる。

彼女自身、そうであれば好いのにとさえ思っていた。その頃はまだ、岬には何も無かった。休憩所もフェンスも張り紙も無かった。

駆け落ちは失敗するだろう。そして何もかも失うと英語の教師は考える。漠然と死だけがあった。その先の事を口に出したりはしな

い。できない。二人の間では、それは共通の意味だった。自然と脚は岬へと向った。

彼は聴いていた。波の声、風の詩、雨の足音。

バスが、岬までの道のりを走ってくる。今日と同じように冷たい雨が降った夜。英語の教師と彼の姉がバスから降りた。彼女は、よそゆきの真っ白いドレスに黒いベールを纏っている。それはウェディングドレスであり、喪服でもある。男のほうも黒い礼服をきっちりと着込んでいた。

言葉はいらない。ただ、そこには崖があつた。潮風は吹き荒れていて、雨が渦を巻いて二人を祝福し、岩が二人を飲み込むはずだった。

けれど、運命はその先を続けた。二人の体は空中で分かれた。抱き合っていたはずの体は突風に吹かれ。男は彼女を突き飛ばした。岩に飲まれたのは男で、彼女は少し離れた海まで届いた。届いてしまった。

そして生き残った彼女は、病院で目を醒ます。それは酷く陳腐でくだらないその後だ。すべてが終わった後。想像の向こう側で、彼女は生きるしかなかった。凍傷と衰弱が彼女の体力を奪った。それ以上に、彼女の精神力は果てていた。

病院の天井は、影を投影するためのスクリーンのように白い。窓からは岬へと続く一本道が見えた。雨の日は決まって傷が疼いた。自分だけが生き残ってしまったという罪悪感と、死ななくてはという使命感が彼女を苦しめる。

やがてその気持ちは、彼女が弟に話しをすることによって変化する。愛とは何か、死とは何か。姉の語る言葉の全てが幼い彼の中に入ってくる。

初めて見た夢の続き。駆け落ちした姉の身代わり。古い西洋の人形。愛と死とその向こう側。

病室は暗くて清潔だった。彼は、長い間埃を被っていた人形をミ

リタリー柄の色褪せたバックパックに詰め込んだ。そして、姉の首を細い二本の腕で絞め殺す。くつきりと手の跡が残っている。殺してくれと、叫び続けた姉の顔は安らかとは言えなかったが、彼は満足しなかったし落胆した訳でもなかった。一度家に帰った彼は、黒いフード付きのトレーナーに着替えて、雨の降り始めた小道をビニル傘を差して歩いた。全てを見ていたのはバックパックの中の人形だけだった。

そんな過去も、今は鈍い記憶の中で終わりを向かえ、黄色い空の断片に雨が激しく降り注いでいる。三本目の煙草には、火を点けていない。

彼はフェンスを越えて、彼女の二回目の死を完結させる。確実に風に飛ばされる事が無いように、慎重に人形を落した。それから、彼は姉への愛を完結させる。向こう側は存在しない。生き残ってはいけない。それは重い一撃だった。だが、胎児の一撃は世界を終わらせる事はできなかった。それはただの一撃で、世界は今も無垢な愛と死とを産み出し続ける。けれども、一つの物語を終わらせるには、その一撃で充分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859b/>

ダメージ

2010年10月8日15時02分発行